

## 凡例

一、多くの既刊書の伝統的な書き方を見ると、読み音が同じでも文字遣いの異なる文献があります。本研究の現代的表記においては、主な参考文献と表記を照合し、同じ歌で読み音が異なる部分や特に説明を要する部分を後註にまとめて示しました。正誤の表示はしません。

二、一つの節には、普通複数の歌詞がありますが、本研究では原則として原典の一一番を取り上げました。また、一つの歌詞は複数の節で歌われることがあります。

三、原典の歌詞は文字遣いを改变せず、字配りもできるだけ原典の通りにして、そのまま上段に置きましたが、活字の使用が技術的に不可能なもの（ルビの傍線など）は省略しました。下段は原典の二三四の中の片仮名を標音とみなして、原則としてそれに従つて、現代仮名遣いで表したものです。

四、原典の歌詞の表記が、原典の工工四の標音と異なる場合は、現代的表記において標音に従つて表記しました。

五、原典の中の囁しの類は、原則として省略しました。

六、現代的表記の漢字は日本語と、音と意味が関係するものを用いました。日本語と音が関係しない、いわゆる日本語への翻訳当て字はなるべく避けました。

七、現代的表記において、漢字にはすべて仮名を振りました。日本語で読める漢字も沖縄語としてどう読むかは学習者には分からぬからです。

八、現代的表記において、仮名には仮名を振りません。沖縄文字にも仮名を振りません。

九、現代的表記において、長音の伸ばしの部分は「ー」で表しました。

十、歌詞の各頁の端に、その頁に出てくる沖縄文字の読み方を示しました。片仮名一字は一音です。例えば「フイ」は[huvi]と読み、「フイ」(hui fui)とは読みません。また、破裂音や不破裂音の一部は表示の混乱を避けるため、例えば「ゴの破裂音」、「イの不破裂音」のように表しました。「ゴの破裂音」の沖縄文字は「ງ」ですが、従来の表記では「イコ」、「イコ」、「ゴ」、「イコ」など多様にあり、紛らわしいからです。